

ミヒヤエル・エンデの新作「はてしない物語」が、静かなブームを呼びつつあるという。邦訳も、一月も経ないのに版を重ねた。二八〇〇円、五八九頁の、この部厚な本を、子どもたちがそれほど読み急いだとは思えない。従って、今回も、前作「モモ」と同様、主たる読み手は大人なのである。

人間の時間の剝奪という形で、現代文明の負性を代表する「灰色の紳士たち」と、それと戦う少女「モモ」。彼女は、年令も出自も不明のよるべない浮浪児で、そのゆえに、文明化されない元型的な子どもであった。彼女は効率と有用性に災いされず、結果として巧みな「遊び手」であり、「他人の話をよく聞く」才能の持ち主であった。彼女が、時間盗人と戦い得たのは、ひたすら、その才能のゆえであり、特別な武器も、特別な力も、必要とはしなかった。与えられた役柄を、ただあるがままに遂行しただけである。

この物語が、子どもにもまして大人たちに注目され、とりわけ、現代文明の直進性に危機感の強い一群の知性たちの筆によって、様々な論考が世に問われたことは、私どもの記憶に未だ新しい。「モモ」に託されたエンデのメッセージは、当時の人々の心を強く捉えたのであった。

「はてしない物語」は、「モモ」よりも多義的であって、メッセージも単一ではない。然し、ここでは、人と世界の破壊者が、「虚無」として捉えられている。人が、夢や物語、つまり日常性を超えた不可視の世界を否定するとき、虚無がすべてを侵蝕するというのだ。救世主の役柄は、やはり子どもにも委ねられる。アトレーユ、バスチアンという二人の少年と、女王「幼ごころの君」……。

人と世界は、子どもによってしか、よみがえり得ないと言うのだろうか。

(H)

## 幼児の教育 第八十一巻 第十一号

十一月号 ◎ 定価二七〇円

昭和五十七年十月二十五日 印刷  
昭和五十七年十一月一日 発行

東京都文京区大塚二ノ一ノ一  
お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼 津 守 真  
発行人

東京都文京区大塚二ノ一ノ一  
お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

東京都港区三田五ノ二ノ一

印刷所 図書印刷株式会社

東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京一九一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所  
所フレイベル館にお願いいたします